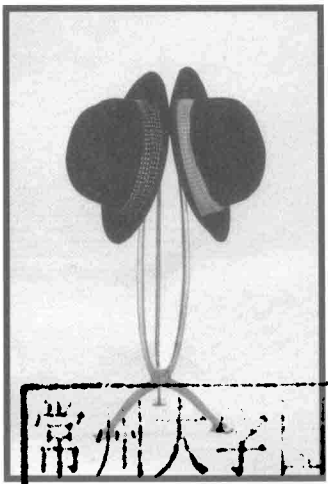
ALPHA CUBIC

アルファ・キュービック

佳き日、良き人、そして、あなたに

柴田良三

マガジンハウス



常州大学图书馆
藏书章

ALPHA CUBIC

アルファ・キュービック

佳き日、良き人、そして、あなたに

柴田良三

マガジンハウス

アルファ・キュービック　よひよひと
ALPHA CUBIC　佳き日、良き人、そして、あなたに

2011年11月25日　第1刷発行

著　者　柴田良三
発行者　石﨑 孟
発行所　株式会社マガジンハウス
東京都中央区銀座3-13-10　〒104-8003
電話番号　受注センター　049（275）1811
書籍編集部　03（3545）7030

印　刷　凸版印刷株式会社
製本所　牧製本印刷株式会社
デザイン　吉村朋子
編集協力　高橋善明

©2011 Ryozo Shibata, Printed in Japan
ISBN978-4-8387-2361-4　C0095
乱丁本・落丁本は購入書店明記のうえ、小社製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。
定価はカバーと帯に表示してあります。
本書の無断複製（コピー、スキャン、デジタル化等）は禁じられています（但し、著作権法上での例外は除く）。断わりなくスキャンやデジタル化することは著作権法違反に問われる可能性があります。

マガジンハウスのホームページ【http://magazineworld.jp/】

佳き日、良き人、そして、あなたに、

感謝の気持ちをこめて、本書をお贈りします。

柴田　良三

本文中の敬称は一部省略させていただいています
また、肩書きは当時のものを使わせていただいています

CHAPTER 1

抜け殻 008
ヴァンヂャケット社 012
キャンティ 015
青春 017
ラグビー 020
頭山秀徳 024
パリへ 026
イヴ・サンローラン 031
サンローラン・リヴ・ゴーシュ 035
小旅行 038
LIFEとTIME 044

CHAPTER 2

始動 048
川添浩史との惜別 052
ミュージカル『ヘアー』 053
サンローラン・リヴ・ゴーシュ開店 056
世界の新しい風 061
結婚 063
決意 066

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

CHAPTER 3

アルファ・キュービック誕生——070
共感を伝える商品を——074
第1号店と本社——077
コシノ・ジュンコ——080
店舗展開——083
ザ・ハウス・オブ・アルファ・キュービック——084
ザ・ショップ・オブ・アルファ・キュービック——086
アルファ・キュービックが追求する女性像——088
レノマ——094
タンタンの死——097
アルマーニ——099
画期的なプロモーション——101
成功——104

CHAPTER 4

ラネロッシ——110
ベレッタ、トマッソ、パスクワリ——116
久保満沙雄——120
辻静雄——123
中村雅一——127

CHAPTER 5

海外進出――134
ゴルフ――139
関東アマチュア選手権――142
冬のベニス――147
創立10周年――149
アルファ・キュービック・トーナメント――151
食の分野へ――157
エル・トゥーラ――159
青木エミ――162
雑誌出版――165
菱沼良樹デザイン事務所――166
夢と理想を追って――168
江川卓とヨーロッパ――171
丹波の松茸とすき焼き――176

CHAPTER 6

事件発覚――180
真相――185
決断の大きな誤り――189
ゴルフ場開発――193
アバイディング・クラブ・ゴルフソサエティ――198
売却――202

CHAPTER 7

高橋治之 —— 206
二信組事件 —— 209
ぬれぎぬ —— 211
離婚 —— 215
実質的な破綻 —— 216
新会社設立 —— 219
不渡り —— 222
決着 —— 224

CHAPTER 8

次代を創る人たちへ —— 228
日本の行方 —— 236
佳き日、良き人、そして、あなたへ —— 239

あとがき —— 244

CHAPTER / 1 OF
ALPHA CUBIC

抜け殻

1966年（昭和41年）6月、梅雨入り前だというのに、ビルの谷間から夏のような陽射しが東京の街を強く照らしていた。

ハーフの石井がスクラムサイドを衝くと、ボールはフランカーの堀田から巨漢のロック竜崎に回った。

竜崎が巨漢の体躯にものをいわせて10ヤードほど前に出ると、ボールを再び手にした石井はスタンドオフの水原に回した。

水原は加速して相手のマークをずらし、対面を振り切りそうになっていた私に、絶妙のタイミングでボールをパスしてきた。

相手ウイングのマークを振り切った私は、フルバックと一緒にバックアップしてきた相手フランカーを思い切り引き付けてから、ノーマークになっていた相良に長いパスを送った。

完璧なトライが決まった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

ふと気づくと、汗と泥にまみれながら必死に向かっていった、学生時代の中でも最高のラグビーの試合を思い出していた。

私はコンクリートの歩道に立ち止まり、眩しく輝く空を見上げながら、

「これでいいのだろうか。必死になって向かっていく自分がいない」

と思った。

「何か足りない、大切なものが足りない。これから先も、このように同じ気持ちでいなくてはいけないのだろうか」

気がつくと、汗が、額や脇から流れるように落ちていた。

前年の暮れ、父親が倒れ、10日間ほど意識が戻らぬまま、逝ってしまった。絵画や陶器を愛する優しい親父だった。

親父は末っ子の私には、特別甘かった。姉2人と兄とかなり年が離れていたためか、母親も姉たちもいつも優しく、私には叱られたという記憶がまったくない。

私は大学卒業後、ある証券会社にお世話になった。気の進まない就職だった。大学時代ラグビーに明け暮れて、けっして学業優秀とはいえなかったが、他にも、ラグビーをやらないかと誘ってくれた会社もあった。証券会社に入れたのは、親父が口をきいてくれたおかげに違いなかった。

その父親も亡くなった。またちょうどその頃、中学3年から交際を続けていた美智子との別れもあった。

ラグビーに熱中していたときのように、汗と泥にまみれながらも自分の輝きを自分自身に感じることができずにいた。

「これでいいのだろうか」

と何度も思った。1966年の夏が近づいていた。

以前、ラグビーを会社でやらないかと声をかけていただいた大学の先輩に思い切って電話を入れてみた。

「林田さん、ごぶさたしております」

「おお柴田か、久しぶりだな。どうだ、元気でやっているか」

「何とかやっております。一度うかがってもよろしいでしょうか」

今頃になって就職の相談を持ちかけられるなどと思っていない先輩は、

「もちろんいいよ。昼飯でも食おうや」

と学生時代と同じように言ってくれた。

「ありがとうございます。それで、……就職の件ですが、もう遅いでしょうか」

「就職の件って、うちの会社にか。……。新卒の配置が決まったばかりだからな。本気で来る

気があるのか」
「はい。今からでも可能性があるのでしたら、ぜひ」
「そうか、よし分かった。すぐに社長と相談してみるよ。連絡する」
しばらく経って、林田先輩からコーヒーショップに呼び出された。そこで紹介された大川専務は言った。
「わが社へ来てくれる気になったの、ありがたいね。他の新入社員はすでに配置が決まっているので、とりあえず店舗で頼むよ」
大川専務の話をうかがっていると、お洒落な出で立ちをしているのに、妙に眼光の鋭い人が店に入ってきた。大川専務はいきなり声をかけた。
「岡野君、チョット。君の部にひとり入れてくれないか」
「彼ですか、分かりました」
私を一瞥して、あっさり言った。
「よろしくお願いします」
「帰りに僕のところへ寄ってください。専務、後は任せていただいてよろしいのですよね」
岡野さんという人は念を押すように言った。

ヴァンヂャケット社

株式会社ヴァンヂャケットへの入社が決まった私は、店舗ではなく、岡野さんが率いる仕入部に配属された。大卒の給料は1万9000円だった。仕入部は、総勢16名、いつも活気と若さにあふれていて、それまで勤めていた証券会社と比べると、まるで異国のような雰囲気だった。

仕入部の一員となった私は、ラグビーのグランドにいたときと同じように、生き生きと、思い切り汗を流せそうな気持ちになった。同期に慶応卒の安藤、学習院卒の小林という輝きを感じる仲間がいたことも心強かった。

しばらくして、ヴァンヂャケット社は社員300人、売り上げが100億円もある大きな会社だということが分かった。また、仕入部はヴァンヂャケット社の中でも重要な部門であること、後にラングラー社長、オレンジハウス社長を歴任することになる岡野取締役部長は、社内で最も将来を嘱望されている人物であることなどを知った。

「とりあえず店舗」と言われたにもかかわらず、花形の仕入部に配属になったのは、奇跡に近い幸運だった。

しばらくして私が担当したブランドのひとつは、イタリア・モンツァにあるヨーロッパの超高級服飾を扱うスキャッティだった。スキャッティは、ヴァンにとってイタリアで最初の取引先だった。もうひとつは、ヨーロッパテイストの新ブランド、ニブリックだった。

そのふたつのブランドを担当したおかげで、私は、伊勢丹の山中、剣持、鈴木、頭山、西武の堤、和田、米谷、水野、三越の津田、喜連、岩佐、坂倉、高島屋の日高、大倉、竹内、阪急の西村、松屋の古屋（敬称略）といった、重鎮となられている百貨店の多くの方々と接することができた。後になってアルファ・キュービックを展開したとき、そうした方々に大変お世話になることになる。

１９６０年代のヴァンは活気があった。社員も若く血気も盛んで、そのせいでいろいろなトラブルもあったが、とにかく生き生きとしていた。

仕事もラグビーにも必死になっている自分がそこにいた。

ある日、仕事を終えた帰り際、石津謙介社長と秘書の林田先輩と会社の出口で一緒になった。

「柴田、めしを食べに行こう」

ほとんど顔すら合わすことのない石津社長から名前を呼ばれ、そのうえ、食事の誘いを受けたのだ。そのときの驚きと嬉しさは、今でも忘れられない思い出になっている。

石津社長の車を緊張しながら運転して、青山から六本木へ向かった。

途中、隣を走っていた車があり、その車にお洒落な美女3人連れが乗っていた。美女3人が目に入った石津社長は、私に命じた。

「柴田、隣の車のあの3人、追いかけて誘おうよ。お前、行ってこい」

早い話がナンパである。

石津社長に命じられて、私は、なんとしても成功させなくてはいけないと気合を入れ、交差点で止まったところを飛び降りて、彼女たちの車のウインドーを叩いた。

「うちの上司がお好きなものをご馳走させてほしいと言っております。少しでもいいですから時間をいただけないでしょうか」

私は強引に3人から同意を取り付けた。

「オーケーです。ついてくるように言いましたが」

「ほう。それなら俳優座の横にある中華の皇家飯店にしよう」

女性たちが了解する様子を見ていた石津社長は、満足そうにうなずいた。

強引な誘いに応じてくれた3人の女性は、青山で小さなブティックを経営している頼子と、広告制作会社でデザインをしているOLの映子と房江であった。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com